

---

# バカとテストとお嬢様

亜己那

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカとテストとお嬢様

### 【NZコード】

N8085Y

### 【作者名】

亜己那

### 【あらすじ】

2年生になつた明久達の前に現れたのは、軍隊育ちのお嬢様！？

しかも、試召戦争なのに召喚獣を使わない！？

「どーいうことだよ がくえん…ババア長！」

「なぜ、わざわざ言いかえたんさね…」

「それはきっと、明久が観察処分者だからだ。ババア長」

「…もういいさね」

## オリキャラ設定

高村 彩乃  
たかむら あやの

祖父は海軍幹部

父は、軍隊パイロット

母は、某テレビ局の会長の娘  
と言う、根っからのお嬢様

父と祖父の影響により、運動神経がとてもいい

得意科目は、数学・英語・社会（公民）

で悪くとも300点は取れる

ほかの科目は、ほぼ200点台

今回は、勉強が厳しい自分の家に反発してわざとFクラス入りした。  
使えるコネは全て使う

外見は、銀魂のミツバだが、性格はおでんば

吉田 大河  
よしだ たいが

彩乃の幼馴染であり許婚

運動神経は良いが、頭は悪い

彩乃の父から、彩乃を守る役目を頼まれている為、彩乃に近づく者  
には体罰を与える

得意科目は、保健体育、社会（歴史）  
で400点は取れる

その他は100点取れればよい方

外見は、SKET DANCEのスイッチだが全然冷静じゃない

試合戦争はあるが、召喚獣はできません

## オリキャラ設定（後書き）

記載テストと意気込み「あ  
「がんばりますので応援よろしくおねがいします」

お嬢様きたる！

## 文月学園

新設校にして、現在世間で最も話題を呼ぶ新技術“試験召喚システム”の試験採用校。

学力低下が嘆かれる昨今に新風を巻き起こし、進学校であると同時に最新技術の実験場としても知られる学園。

それ故、数多くのスポンサーがついている。

その中でも、文月学園への寄付がトップクラスなのが、海軍幹部

高村 和幸

彼の寄付により、文月学園が成り立つて入ると言つても過言ではない。

そのため、彼の孫娘 高村 彩乃と許婚である 吉田 大河も当然文月学園に入学した。

2人とも成績はトップクラス、2年の振り分け試験でも当然Aクラスだろうと皆が口をそろえて言った。

しかし今、そんな2人の目の前にあるのはAクラスのシステムですかではなく

かびた畳 足が折れた卓袱台 綿の入っていない座布団 チョークのない黒板

そのクラスは

通称、『バカの集まるFクラス』

振り分け試験当日

「ほんとにいいのか、彩乃」  
「いって言つてるでしょ大河、絶対にFクラスに入つてよー」  
「俺は別に平気なんだよ。ただ、お前は・・・」  
「あのねえ。私はもうお嬢様生活なんて、う・ん・ざ・りなのー!これからはFクラスで普通の生活をするんだから」  
「はあ・・・」

黒髪の少年、吉田 大河は知っていた。こうなつた彼女はもうとめても無駄だと

『俺が、お父様に怒られるんだよ。それにFクラスにはお前を狙うやつが多そうだし』

そんな大河の思いを知つてか知らずか

亞麻色の髪の少女、高村 彩乃是

『いい大河。全部の問題にふざけた解答を書くのよ。例えば・・・

問題

『調理の為に火にかける鍋を制作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。このときの問題とマグネシウムの代わりに用いるべき合金の例を一つあげなさい』

『問題点……ガス代を払つてなかつた事  
合金の例……未来合金（ すぐく強い）』

みたいにね

ノリノリだった

「あれ、今のどつかで見たことあるぞー。あれだよね、アニメぱくつたよね！？」

「…………あつ、早くしないとテスト始まっちゃうよー。」

「スルーかよ」

そして、冒頭に戻る

「予想以上にひどいな」

「ええ。でも大丈夫よ」

「へえ～、なんか策でもあるのかい？」

「高村家の力をすれば、小一時間で快適な空間に・・・」

「だめ！んなことしたらFクラスに来た意味ないだろ」

「そつか・・・」

そんな会話をしながら席に着き、かばんから荷物を取り出していると

「おい、彩乃」

「な～に？ 大河？」

「お父様から伝言だ」

そつ言つて、茶封筒を手渡す。

そこには、『丁寧に『高村 彩乃様』と書かれている

そして内容は

「Fクラス入りおめでとう。そんな彩乃に私から進級祝いをあげよう。」

【文部省の近衛のマンションを一時預けた

】

「これから一年半で戻りなさい

父

「う・・・んでしょ

## お嬢様きたるー（後書き）

駄文すいません！

明久たちは、次回出でます。（予定です）

ストーリーは、私は原作をまだ一巻までしか読んでないので、オリジナルが多くなると思います。

感想、コメント、レビュー、評価全てお待ちしています！

## お嬢様バカと出合ひー。

「う・・・・・ そでしょ」

「Fクラスに入ったの、相当怒つてるな  
だね。あれ？まだ続きがある」

「部屋は一つだから2人の仲をこの一年でもっと深めちゃえ！彩乃  
！」 母より

ビリッ ビリビリビリ

「な んで」

「あ、彩乃？」

ビリビリビリ

「何で大河と一緒にすまなきやなんないの～！～うつうつ

「彩乃、泣くなよ～！俺が泣かしたみたいじゃん！」

それでも、彩乃が泣き止む気配がない

「あ～、もう。彩乃、一回保健室行こう。なつ？保健室で休もう  
？おい、おい」

「・・・ண

「寝てるし～」

同棲もいいかもな

そんなことを思いながら、保健室へ向かう大河  
と入れ違いに、

「う～す、つて誰もいねえよな

赤い髪のオスゴリ」 坂本 雄一がやってきた

30分後

「つん

「お、起きた」

ପାତ୍ରିକା

「保健室、お前は今までよだれたらしながら爆睡してた」

誰かに言つたら、永眠

わあーてるよ！誰にもしゃべらねえよ！」  
教室行くぞ！」

1  
A  
L

5分後

卷之三

あとで読む

「好」字

卷之三

「疲れた、ここ広い」

「文句言つな！ほら、あれがFクラス」

ターニー

卷之三

卷之三

「归鸿」二首

ガツシャーン

「帰ろうか

「そうだな」

ガラガラ

あ、  
吉田君に高村さん、今  
皆さん~~の~~紹介をしてるので君

「さあ早くして下さい」

卷之三

ガラガラ

「皆さん、遅刻の一人が来たので自己紹介をしてもらいます」  
では、まず吉田君から

一では、まず吉田君から

「はい、吉田 大河と言います。よろしくお願ひします」

「では、高村さん。」

「はい、高村 彩乃です。よろしくお願ひします」

『あー…………やの…………』

「福原先生、一つ言い忘れたのでいいですか？」

「はい、どうぞ」

『チツ…』

「彩乃に近づく奴は、俺が体罰を与えるからな?」

『やつてみろ!』

「福原先生、私からも一つ。」

『なんですか!?』

「私と大河は幼馴染で……」

シャツ（カッターが飛ぶ音）

シユツ（大河がよける音）

『チツ』

「許婚です」

『異端者吉田 大河をころせえ!』

ドタドタドタ

「彩乃に、近づくな!」

ガンツガンツガンツ（大河が、黒装束の奴らをヘブンへ導いた音）

『彩乃に近づくなと言ったよな?』

「ああ、言つてたな。吉田。俺は近づかないが」

「お前は、坂本！ 奥さんは元気か？」

「何を言つてるんだ？」

「霧島がいつも言つていた。私は雄一の奥さんだつて」

『翔子のやろお』

「あれ？ 雄一って霧島さんと知り合いなの？」

やつて来たのは、吉井明久

「今、バカつて言つたよね？」

「うるさいよ、吉井君。」

『バカ』

「いや、『つるさい』とか言つ以前に君も今バカつて言わなかつた?」

「つるさいよ、吉井君。」

「あの、高村さん痛いんだけど・・・」

吉井の頭には彩乃の鉄拳が食い込んでいた。

彩乃が手を離すと、吉井は倒れた

「よつ吉井君!-?」

「吉井!-?」

「ふう、静かになつたあ」

## お嬢様バカと出合つー（後書き）

わかりづらくてすいません。  
目線としては、大河っぽい感じですね。  
次の次の回には、戦争のルール乗せたいな  
感想など、お待ちしています。

お嬢様は軍隊育ち（前書き）

完全大河目線です

## お嬢様は軍隊育ち

「ふう、静かになつたあ」

「彩乃、俺言つたよね？」

バカ

俺の目の前では、もう原形を残さない吉井とそれを看病する  
ピンクでロングの髪をした巨乳とオレンジでボニー・テールのペッタ  
ンコ

「何かあつたら俺がお前の代わりに罰を『与える』って」

「私も、罰を『与えたい』！」

「この、わがまま女！」

「バカいうな！お前は、兵学校を首席で卒業したんだぞ！」

「大河は、次席でしょ！首席も次席も変わんないわ！」

「お前になんかあつたら、俺が困るんだよ！」

「お父様の事だつたら、しばらくは私たちと会おうとしないわよー！」

「お父様のことじやねえ！俺の問題だ！」

「夫婦喧嘩の最中悪いが、ひとつう———『ゴパア』

坂本が白目をむいて倒れるが知つたこつちやない

「ふざけてんの？坂本！私は、こんなやつと夫婦じやないわー！」

「彩乃、死人は何も聞こえないぞ」

「でも、許婚だろ？」

チツまだ生きてたか

「彩乃！霧島に電話！」

「OK！大河！」

「もしもし？霧島さん？私、彩乃。お宅の旦那がさつきから私にセ  
クハラしてくる」

「…………雄二、浮氣は許さない」

相変わらず早いな

「翔子、俺はお前のだんなになつた覚えはないんだか？」

ブシコ

「ギヤアアアアアア、目がああああ

ざまあみろ

「あのお、霧島さんと坂本君はどういう関係なんですか」

「ただの「夫婦」」

「違うからな、姫路。俺と翔子はただの「夫婦」」

「ふつ、夫婦・・・」

「だから違うって！」

うつとうしいやつだ

「霧島、坂本は今からデートに行きたいそーだ」

「吉田、テメエ！」

「・・・・・うれしい、雄二」

ガラガラガラ

「これで、邪魔者はいなくなつたな！」

「ううつ、あれ？みんな何やつてんの？」

ああ、そういうえば吉井もいたな

しばらくお待ちください

ひと段落して、俺、彩乃、坂本夫妻、吉井、姫路、ペッタンコは卓  
袱台を囲んでいた

「俺から一つ聞きたいんだが、吉田達が行っていた兵学校って言う  
のは？」

「海軍兵学校だ／よ」

「・・・・・それって、潰れたはず」

「確かに潰れた。俺たちは行つてたのは海軍の中の特殊部隊の方だ」

**お嬢様は軍隊育ち（後書き）**

今日は本と読みついでです！すいません！

お嬢様は國家秘密！

「ちょっと待つて、大河」

「なんだ？彩乃」

今、俺がいい感じに話しうと「うじやん！」

「みんな、少し黙つててね」

「なんだよこいつは

「何で黙んなきやなんないのよ…」

「少し黙つててね、ペッタンコ」

言つた。こいつ面と向かつて言つたぞ

「彩乃、今のはいくらなんでもペッタンコに失礼だぞ」

「あんたも言つてるから！それに私はペッタンコじゃない…私は、

島田 美波！」

「あつそ、とにかく黙つてて。島田さん？」

彩乃、殺る気満々だよ…

「よし、みんなが黙つたところですよ…」

「盗聴なんてやめて、出てきなさいよ～」

「こいつ、天井に向かつてしゃべりかけたぞ！

ついに頭がやられたか！

ガラガラ

「…なぜ、わかつた」

「ムツツリー二の盗聴がばれるとはのう」

入ってきたのは、ムツツリー二と美少女

「ムツツリー二はわかるが、隣の美少女は？」

「…木下 秀吉（高村の写真入荷したぞ）」

「木下さんか、よろしくな（3ダース買おう）」

「ワシは、男じゃーそれに、お主ら本音が漏れてるぞ！」

えつ、男なの？

「吉田、話がそれでるぞ」

「ああ、悪いな坂本」

「それで、海軍兵学校と言つのはなんなんだ」

「海軍の中の秘密組織だ。全国で腕のありそうなやつを拉致つて、育成し、海軍のホープにする」

「・・・・・それは、犯罪」

「ああ、だが、誰も気づかない。引き込んだ奴は、死んだことにされるからな」

「それは、無理なのではないかの？」

「いや、国家プロジェクトだからな。戸籍から名前を消して、死体を作ることとぐらい簡単さ」

「つてことは高村さんと吉田君は死んだ」とになつてるんですか？」

「それに、なんで吉田と高村が引き込まれたのよ？」

「それは・・・」

流石にそれだけはいえない

「大河、ここからは私が言つわ

「いいのか、彩乃」

「平気よ。別に、私はこの一年高村家とは関係ないんだから」

「ねえ、<sup>バカ</sup>高村家って？」

ほんとに吉井はバカだな

「高村家って言うのは、私の実家よ。日本の軍事は私の家に支配されてるし、一テレって知つてる？」

「ああ、あの視聴率日本一のテレビ局だろ？」

「そう、あそこも高村家がつくったテレビ局よ。この文月学園も高村家がスポンサーだし」

「すごいんですね、高村さんのおうち」

「全然すごくないわ、家の人はみんな変なのが多いし」

高村家がなければこいつは普通に暮らせたんだよな

「それで、その高村家がどうしたんだ？」

「その、高村家のトップであり私の祖父である高村和幸が海軍兵

## 学校を作つたの」

「…それで、強制的に入ったのか？」

「そうよ、だから私と大河は死んだことになつてないの」

わすかに  
あれに言えなしが

そ二だつたんた どひでとひで霧島をかしるの」

元の古語は漢の後用

『異端者坂本をこひせえ~~~~~』

黒装束め生きてたか！

「翔子ってめ何言ってんだ！」

「坂本、こりはまかせろ！黒装束は俺がやる！」

「田畠！ あわなし！」

いじて事よ！」

「うう、用、う可も無」

卷之二

『新編類聚御覽』卷之三

ガラガラガラ

「いた！坂本だ！」

「おー! お前らの相手は俺だよー」

バンツバンツバンツ

「大河！私も混ぜてよ！」

「いいよ、好きなだけやれ！」

彩乃の銃から逃げたものはいないからな

一せ二たあ！それじせ

ハハハハハヌツ

ノタノタノタノタ

八

お嬢様は國家秘密！（後書き）

ぐつだぐだです・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8085y/>

バカとテストとお嬢様

2011年11月27日11時51分発行